



ごうちゃんねる (GO-CHANNEL)

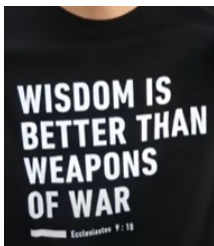
2023/10/24

ハマスのプロパガンダを撒き散らす日本の中東研究者たち

東住吉キリスト集会 高原 剛一郎 氏



お元気ですか。高原剛一郎です。私は昨晚遅くに東京から戻りました。東京では、中東問題の解説やバイブルメッセージをさせていただきました。そこに、『VISION POSTAL/ビジョン ポスタル』というデザイン会社の方が来られてたんです。聖書の言葉をあしらった製品を色々作っておられて、このトレーナーを下さいました。



『知恵は武器に勝る』伝道者の書9章18節のデザインですね。今の時代ほど、この言葉の真実が的確に証しされている時代はないんじゃないかと思って、今日はこれを着て収録しています。

前の動画で『ユダヤ人は有史以来』という本を紹介しました。今日ちょっとAmazonを見てみたら、完売ですねえ。

紹介する前は30数冊あったんですが、皆さん購入してくださったんでしょう。最後の方は数万円出されたと思います。

この本を書いたのは、アメリカ人の女性ジャーナリストのジョーン・ピーターズ。彼女はユダヤ人で、リベラル・左派の人です。

弱い人たちの人権を、何としても守っていくことに非常な使命感を持っていて、実に様々な調査番組というか、調査報告や書物を書いて、高い評価を得た方です。

彼女のジャーナリストとしての手腕に注目したのが、時の大統領カーターでした。カーター大統領は、「中東和平のためには、イスラエルに強い譲歩を求めなければならない。そのためには、イスラエルに圧力を掛けなければならない。ユダヤ人がパレスチナ人の土地を取って、不当なものの上に今の国家があるということ突きつけることで、モラル的に彼らを訴えることができる」と考えました。

そのような観点で、今までの歴史的経緯におけるイスラエルの非人道的な部分に注目させ、説得力のあるレポートを書いてもらうのに、ピーターズさんほどふさわしい人はいない。それで、ホワイトハウスは前払いで巨額の金を払い、中東問題の真相に迫ってくれと頼んだんです。

彼女は使命感があるので「任せてください！」ということで、その費用を貰って現地調査をし、国連の調査に当たり、各国大使館の様々な公開情報を調べていくうちに、今まで自分が聞かされていた中東問題の物語がなんと神話で、誤解で、いびつに編集された情報であるかということが分かったんですね。

それで、ホワイトハウスから貰っていたお金全額を返金し、自腹ですよ、本当のことを追求するために、自腹でこの問題を調査しました。

その結果書かれた本が『ユダヤ人は有史以来』です。

つまり、ユダヤ人は有史以来、この土地に住んでいたし、この土地に権利があるし、今世界中で振り撒かれているフェイクのニュースは、実に根拠のない悪意あるものであることを、見事に論じている本なんです。

ただね、今回もう完全に完売。僕は持ってますよ。でも、皆さんは手に取って読むことができないでしょ。そこで、この本を噛み砕いてお話ししようと考えました。そうする義務のようなものを、私は感じています。

というのは、今の中東ニュースの番組を見てると、色んなところから出て来た“中東問題の専門家”と言われる方々が、まあ、しれっとウソつきますね。しれっと。私に言わせると「よく言うよな！」ということなんですが、そんな嘘について、一緒にいる司会者もパネリストもゲストも、「いや、それ違うじゃないんですか」って、だれも突っ込まないんです。突っ込めないんです。だって知識がないから。

そんな作られた・編集された情報を浴びるように聞いているので、だれも反論できない。ので、そんな番組を浴びるように見ていたら皆、それが事実であるかのように思い込んでしまうんじゃないですか。

こうして、日本でそういう番組を見ている日本国民だけが、世界の主流というか、本当に分かっている人たちから、どんどんどんどんズレていくんですね。私はこのことについて非常に憂いているので反論したいと思い、このシリーズを挙げているわけです。

が、まあ色んなところで、やっぱり結論としてどういうところに落ち着くかということ、「ハマスは悪い。テロは悪い。しかし、ハマスに悪いテロをさせる第一原因はイスラエルが作ったんでしょ！」これですよ。

「イスラエルという国が出来ることでパレスチナ難民が生まれて、彼らは未だに国を持たないじゃない。彼らの怒りや悔しさを代弁するのに、悪い方法かも分からないけど、テロをやるのは、ある意味やむにやまれぬことと違うんですか。」

この論調ですよ。嘘ですから！

この番組でも、私がそういう説明をした時、「そんなの信じられねえよ！」というようなコメントが出て来るんですね。「なぜそんなコメントになるかな」と思ったら、やっぱり無理ないとも思うんです。

私たちがテレビや色んな映像で見る現実って、どんな現実ですか。

イスラエルというハイテク国家・先進国家・民主国家・近代国家、どーん高層ビルが建っているような、ピカピカの国家が見えて来るんですね。

同時に、すぐ近くにパレスチナ難民という、国を持つことができない人たちがいる。

「なんでユダヤ人たちは大きなビルを建てる近代国家になり、すぐ隣に住んでいるパレスチナ人たちは国を持つことができないんだ。これは、ユダヤ人が彼らを虐げている結果ではないか」と繋いでしまうんです。そんな説明を聞き続けているから。

中東問題の専門家と言われる方々が安易に使うたとえの1つが“玉突き理論”です。交通事故で玉突き事故がありますね。暴走している車が、止まっている前の車にドーンと追突する。追突された車は、その前の車にまたドーンと追突する。一番前の車は何も悪いことしてないのに、非常に大きなダメージを受ける。自分の責任じゃないのに、追突されてレーンから外れてしまう。

これを、パレスチナ問題を説明する時に転用するんですよ。

「ユダヤ人はヨーロッパで迫害されて、ヨーロッパ社会からドーンと追い出された。追い出されたユダヤ人が、パレスチナ人が住んでいる所に殴り込みをかけて、彼らにドーンと追突した。追突されて出て行かされた人たちがパレスチナ難民だ」という説明です。皆さんの中にもそのような理解で、この問題を承知している方が多いのではないのでしょうか。しかし、そうではないんですね。

この問題については前回は申し上げましたが、1947年11月29日、国連総会でパレスチナ分割決議案が討議され、圧倒的賛成多数で採決されて承認されたんです。パレスチナ分割決議案とは、「パレスチナの土地に2つの国を造ります。ユダヤ人にはユダヤ人の国、アラブ人がたくさん住んでいる所にはアラブ人の国。ユダヤ人の国とアラブ人の国、それぞれ別個に2つの国を造りましょう。」これが国際承認されたんですね。

なので、この瞬間に、双方とも自分の国を造る条件が揃ったんです。イスラエルは、自分たちに割り当てられている地図は、イスラエルを非常に分断する不利な立場だったのですが呑みました。しかし、アラブ側はそうではなかった。その話は既にしたので、今日は別の話をします。

分割決議案が承認された1947年11月29日の翌日の11月30日から、このパレスチナで何が起こったのか。アラブ側によるユダヤ側へのテロです。まず30日に5人のユダヤ人がテロで殺されました。以後、分割決議案承認から4か月間に、900人以上のユダヤ人たちがテロで斬殺されたんです。

なぜそんなことになったのか。まだ独立宣言してませんが、国連の承認が出た以上、ユダヤ人たちは必ず国を造ると宣言しました。この必ず国を造るという意志を挫くために、テロで脅して国造りを引っ込めさせる。恐怖で脅して自分たちの政治的主張を通す。そのためにテロが繰り出されて行ったんです。

それがどんどんエスカレートしていくんですが、これを止めるのは、当時パレスチナの地に警察権を持っていたのはイギリスだったので、イギリスがやるべき事だったんですよ。イギリスの委任統治領なので、治安コントロールはイギリスがしなければならなかったんです。

ところがイギリスは、ユダヤ側が武装することには刀狩りをしてたんですね。武装している人たちを逮捕・連行して。そして、アラブ側には甘かった。

というのは下心があったんです。この時のイギリスは、完全に反ユダヤ・反イスラエルです。イスラエルが独立宣言しても国家承認しなかったんです。2年間も。他のほとんどの国々が、「イスラエルは独立宣言して、第一次中東戦争で独立を守り抜いた一人前の国だ」と認めている時に、イギリスは国家承認しませんでした。

イギリスは一番重要な資産を中東に持っていました。スエズ運河です。これはエジプトにあります。アラブの反感買って、スエズ運河が閉鎖されたり、そこで紛争事が起こるのはイギリスの国益に反するのでアラブ寄りだったのですが、それは別の機会に話すとして、とにかくね、分割決議案から独立戦争までの約半年間に、たくさんのユダヤ人たちがテロで大被害を被った。

そして、自分たちの内側で被害が出るだけではなく、国の外からも攻撃を受け始めたんです。特にシリアとレバノンですよ。この2つの国が、イスラエルになる割り当て地の国境となる所を突破して、侵略戦争を始めたんです。

つまり、独立する前から既に、内側でも外からも攻撃を受けているんです。独立する前でもそんなことがある。イギリスが見張っている時ですら、非公式の戦争みたいなものが始まっている。ましてやイギリスが撤退して、イスラエルが公式に独立した時は、アラブ6か国がもう大手を振って、バサッと入って来て戦争することでしょう。

その時、独立する前に、パレスチナに住んでいた、特にユダヤ人がたくさん住んでいる割り当て地にいた裕福なアラブの人たちは、2万人以上がベイルートやカイロに逃げたんですね。「戦争はどうせ短期間で終わるから、ほとぼり冷めるまで、外国にちょっと避難していきましょう。」

今のレバノンのベイルートはヒズボラのこととかあるから、皆さん、ロクなイメージないかもしれませんが、この時のベイルートは中東のパリと言われたんですよ。非常に西洋化した、金持ちが好むような高級な町だったんですね。そのようなところに逃げて、そして、これが1つ目の難民のグループになっていくんです。

2番目の難民のグループは、もっと大きなものになっていくんですね。アラブ世界を統括する組織にアラブ高等委員会があります。これから、このシリーズにちょこちょこ出て来ると思います。ユダヤ人割り当て地にいる多くのアラブ人たちは、アラブ高等委員会から命令を受けていたんです。「すぐ戻れるから、そこから出なさい。アンタらがおったら、我々が攻め込んだ時に、だれがユダヤ人かアラブ人か見分けがつかないから、出て行って巻き添えを食わないようにしなさい。アンタらが出て行っても数日ですぐ戻れる。しかも、戻って来た時にはユダヤ人は全滅している。ということは、ユダヤ人の財産は全部山分けできる。」

戦争に巻き込まれない。自らは被害を受けない。

戻って来たら、ユダヤ人の財産を自分の物にすることができる。自分の財産+a。それで、たくさんのアラブ人がそこから出て行ったんですね。出て行ったんですけど、負けたんですよ、アラブの方が。イスラエルは1週間もあれば全滅すると思われてたのに、できなかったんです。ここは資料で紹介しましょうね。

サウジアラビアの情報大臣で、アブドゥルアズィーズ大学の学長まで務めたムハンマド・アブドゥ・ヤマニ氏が、1990年10月24日付のサウジアラビアの新聞ウカズで、こう言っています。

「ユダヤ人の手から解放するため、アラブ諸国の軍隊がパレスチナに侵攻した時、何が起きたのであろうか。軍司令官たちはアラブ住民に対し、『数日間でよいから土地から離れよ。戦争が終われば戻れる』と言った。パレスチナ人は土地を離れた。アラブはパレスチナ解放に成功した。その後馬鹿なことに、停戦に合意し、イスラエルの存在を許したので、パレスチナ人を離散状態に放置してしまったのである。」

これ、はっきりアラブ側ですよ。サウジアラビアの情報大臣が明確に言ってるんですよ。「なんで難民ができたの？アラブ高等委員会が『難民にならずにすぐ戻れるから、すぐ出て行きなさい』と言ったけど、彼らが戦争に失敗したので、難民のまままで終わってしまったんだ。」

それから、アメリカ国務省が、ハイファのアメリカ領事館のオブリー・リップペンコット領事が、1948年に本省宛てに打った電文を公開しています。

打電日は1948年4月26日、すなわち独立戦争の前ですよ。

「当地方を支配するムフティ（イスラム教指導者）たちはアラブ人に、全員町から退去せよと勧告し、大勢の者が去っている。」

これはイスラエルの情報ではないんです。サウジアラビアもアメリカも、第3者の情報提供者が言っているのは、「なぜ難民が生まれたのかというと、アラブ高等委員会の呼びかけに応えたからだ。」

つまり、アラブ難民を作ったのは、イスラエルが追い出したからではなく、アラブ高等委員会が出て行けと命じたからなんですよ。



後に第5代イスラエル首相になるゴルダ・メイアは、初代首相ベングリオンの片腕でした。

ベングリオンはゴルダ・メイアに、「アラブの隣人たちに『出て行かなくてもいい。むしろそこに留まってほしい。我々は共存できるんだ。共存することによって、イスラエルが民主国家であることを、あなたたちに知ってもらえる』と説得しに行ってくれ」と言いました。

これについては『ゴルダ・メイア回想録』という本があります。もし古本屋さんにあったら一押しです。ぜひお買い求めください。



この回想録の中に、こんな文章があります。

「ベングリオンは私に、『海岸にいるアラブ人たちに、戻るように説得に行ってもらいたい。(ちょっと飛ばして)彼らは何も恐れる必要はないのだ』と言った。私はすぐに行った。私はすぐに戻るよう請うたが、彼らの答えは一つであった。『何も恐れることがないのは分かっていますが、行かねばならないのです』と言うのだ。彼らが去ったのは我々を恐れたのではなく、アラブの大義に対する裏切り者とみなされるのを恐れたためである。」

隣人のアラブ人たちが去ったのは、ユダヤ人を恐れたからではなく、アラブの大義に対する裏切り者とみなされるのを恐れたためである。

去らずに留まって、そこに一緒に住み続けるのは、イスラエルと共存していくということでしょう。イスラエル全滅を目標に掲げているのがアラブの大義なんですよ。にも拘わらず、「いや、私たちは全滅なんて物騒なことはしたくないんです。ユダヤ人と隣人関係を結んで、ここで生活します。」

「おまえ、アラブの大義の裏切り者か！」と自分たちが攻撃対象になる。それを恐れて出て行ったのだ、と言うんですね。

つまり、イスラエルがアラブ人の土地を奪って、その結果、難民になったんじゃないんです。アラブ高等委員会が「イスラエルの割り当て地から出て行け」と言ったんです。出て行かなかつたら、彼らは迫害されるんです。それで出て行った結果、イスラエルは彼らの目論見通りにならず戦争に勝った。そのため難民になってしまったんですね。

だれが悪いんですか。だれが叩き出したんですか。最初に追突したんは誰ですか。イスラエルじゃないでしょ。アラブのリーダーたちだったんです。ですから、もし「アラブの難民はユダヤ人が追い出したから」と言ったら、「あ、また言ってる」「まだ言ってるわ」と、ぜひ思い出していただきたいんです。

最後に一つお話しして終わしましょう。

国連がこの問題に取り組む前、イギリスは委任統治領で約 30 年間統治しました。この 30 年間にアラブ人とユダヤ人両方に、国を造るための案を次々出しますが、とうとうまとめ上げることができませんでした。ユダヤ人の方は受け入れるけど、アラブ人の方は受け入れない。それがずっと続いてどうにもできなくなったので、「もう我々には無理です。国連さん、お願いします」と丸投げしたんですよ。丸投げしたのが 1947 年 11 月 29 日の分割決議案討議になるんです。

この直前の 10 月、イギリスは 30 年間の委任統治を通して、事の本質は何だったのか、パレスチナ委任統治の小さな歴史文書を、学んだこととして国連に提出しました。それを要約している文書があるのですが、その文書こそが、このパレスチナ問題の本質を見事に言い当てているんですね。

「ユダヤ側にもアラブ側にも絶対に譲れない一線、絶対に譲歩できないものがある。ユダヤ側はユダヤ人国家を造ること。アラブ側はユダヤ人国家を消滅させることである。」

すなわち、イスラエルは建国という建設的なことに民族の力を注力したんですが、アラブ側は、ユダヤ側を破滅させることにエネルギーを使ってしまったんですよ。イスラエルは自分たちの国を造ることにエネルギーを使ったのですが、造られる国を邪魔することにエネルギーを使ったのがアラブ側だと言うんです。この違いが、この差が、ハイテク先進国・近代国家イスラエルと、未だに国を持つことができないアラブ難民の問題なんですね。

これね、今からでも遅くない。今からでも「テロに訴える武装路線はやめる」と言うだけじゃなくて、本当にテロをやめることです。自分たちが持っている力をイスラエル攻撃に使うのではなく、国造りをすることに注力していったら、必ずパレスチナ国家はできます。だって、世界中が味方してくれているんですから。

にも拘わらず、「すべての問題は、イスラエルがアラブ人から国を取り上げたからだ」という論調を日本国民に吹聴している中東問題の専門家たちは、本質的にハマスの片棒を担っているのと同じだし、アラブ・パレスチナ人の将来に害しか与えていない奴らである、と私は考えております。

このシリーズ、まだまだお話ししたいことがありますので、よろしければまたお聞きください。チャンネル登録と、いいねボタンもお願いします。
ではまた、ごうちゃんねるでお会いしましょう。
皆さん、お元気でいらしてください。さよなら！

.. 00.. 0.. 00.. 00.. 00.. 00.. 00.. 00.. 00.. 00.. 00.. 00.. 00.. 00.. 00..

*引用

- ・ゴルダ・マボヴィッツ・メイア「ゴルダ・メイア回想録－運命への挑戦」林弘子・訳（評論社、1980）
- ・画像（Golda・meir/ゴルダ・メイア）<https://loc.gov/pictures/resource/ppm...>